

「レオニーが遺したもの」

カリフォルニアの原野の丘の上で、生まれたばかりの幼子を母がしっかりと抱きしめているシーンを見るだけで、止めどもなく涙が溢れてきました。時は1904年（明治37年）。長じて20世紀を代表する彫刻家となるわが子を抱く母レオニー・ギルモアの母性愛に満ちた決意の固さと強さが、周囲の自然の美しさと一体となった見事な映像で描かれていました。8月下旬に高松で先行して完成披露試写会が行われた映画「レオニー」の一場面です。この映画は、監督の松井久子さんが、自身の前二作の応援団がいち早く結成された高松で、イサム・ノグチの母レオニー・ギルモアの半生を知り、構想から7年がかりで幾多の困難を乗り越えて完成させたものです。

「僕の物語を書くとしたら、すべては父と母の生き方からはじめなければならない」とイサム・ノグチは言っています。伝記で「宿命の越境者」と名付けられたように、彼は母の国アメリカと父の国日本の狭間で、生まれながらにしてアイデンティティ上の苦悩を背負っていたのです。

イサムの母、レオニーは、名門プリンマー大学で、読書好きの抜群に成績優秀な女学生でした。卒業後、渡米していた若き詩人、野口米次郎と仕事を通じて恋に落ち、イサムを身ごもります。しかし、米次郎はイサムが生まれる前に帰国し、レオニーがイサムを連れて日本に来た時には既に別の女性と結婚していました。明治末期の日本という封建的な社会の中で、外国人でシングルマザー、そんな想像もつかないような過酷な境遇でレオニーは生きていかななくてはなりませんでした。

レオニーが人生をかけて遺したもの。それは、東洋と西洋を超越し、「地球を彫刻する」ことを求めた巨匠イサム・ノグチです。生まれてすぐには名前も付けてもらえなかった「ヨー・ギルモア」を、強靱な意志を持ってアーティスト「イサム・ノグチ」に育てあげたのです。牟礼の庭園美術館や札幌のモエレ沼公園の中にいる時に感じる、母なる大地に抱かれているような心地良さは、レオニーの愛に繋がっているのかもしれない。

参考：「イサム・ノグチ 宿命の越境者」（ドウス昌代 講談社文庫）